

(別紙様式10)

2019年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

申請区分: 萌芽的異分野連携共同研究 共同推進研究
産学官連携フュージビリティ・スタディ
共同研究集会 産学官連携課題設定集会

研究課題名: 北大西洋海域における捕獲・処理・消費・廃棄過程を通して見る自然／社会の関係をめぐる総合的研究

研究期間: 2019年度～2020年度

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	区分 (注1)
研究代表者	高橋美野梨	北海道大学・助教	国際政治学	
研究分担者 (拠点外)	赤嶺淳	一橋大学・教授	文化人類学	
	小澤実	立教大学・教授	歴史学	
	中丸禎子	東京理科大学・准教授	文学	
	福永真弓	東京大学・准教授	環境社会学	
	中尾なづな	同志社大学・大学院生	地域研究	
研究協力者 (注2)	林直孝	カルガリー大学・助教／北海道大学・海外研究員	生態人類学	
	Anne Merrild Hansen	オールボー大学・教授	環境社会学	
	篠原雅武	京都大学・特定准教授	社会哲学	

【研究の内容】

(1) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を1000字程度で簡潔に以下にまとめてください。

トマス・ホブズやジョン・ロックに代表されるように、政治学には、自然(環境)が、それだけで完全に自足的かつ持続可能な状態と考える回路がなく、自然は人間(社会)との関係から切り離して対象化する、つまり人の手によって管理されて初めて、その「原始性」が払拭されるという前提があった。だから、政治学は自然を、自己の問題として昇華することができずにいた。しかし、客体(対象)としてのみ自然を観察する従来の政治学的方法論を超えて、社会と自然との境界線を相対化し、両者の関係性をフラットに捉えようとする「惑星政治(planet politics)」を志向する動きが、近年の政治学の中で見られるようになってきている。本プロジェクトは、こうしたトレンドをまずは受け入れ、研究代表者のフィールドであるグリーンランドや北大西洋世界の生物資源をめぐる互酬的世界観を題材に、多様なディシプリンの知を総合的に検討し、惑星政治なる視点の解法を探求するところに目的があった(写真1)。

本プロジェクトの開始当初、議論の足掛かりとしたのは、先行研究において世界の先住民族の資源管理制度の先端的役割を果たしていると評され、社会と自然の関係を根拠付ける科学知と在来知との協働の仕組みが制度化されているグリーンランド域内の政策決定過程の分析であった(図1)。

特に先住民族の生命維持と密接な係わりを持つとされる海生・陸生哺乳類および魚類を対象とする政策決定の場では、自然環境を人間との関係から切り離して対象化する科学知だけでなく、人間が自然環境と密接な係わりを持ち、それに巻き込まれる存在として認識される在来知からのインプットにも比重を置いた決定が下されてきた。それは、両者の相互作用を通じて、よりよい決定を導き出すとする前提が、政策決定者の間で共有されているからであるとされてきた。より具体的には、当該動物の持続可能性に対する解釈や、これに基づく捕獲枠の算定、捕獲期間や場所の設定、動物への係わり方、捕獲方法、致死時間(の短縮)や損失率(の低減)などを求める時などに、在来知からの効果的なインプットが期待されてきたのである。しかし、研究を進めていく中で少しずつ明らかになってきたことは、在来知や科学知が、ある特定のアイデンティティやエスニシティの呈示(自己呈示)という性格を有し、政策決定の場において、ある種戦略的に用いられていると同時に、ある局面では両者が相互乗り入れ可能な形で協働し、政策が議論され、決定されてきたということであった。

こうした作業をふまえ、次年度の取り組みを見据えつつ今年度の議論から導かれた要点は、少なくとも3つあった。一つ目は、在来知でいうところの社会と自然の関係と、科学知が射程におさめるそれとが、そもそも同意なのかという点である。二つ目は、人間と自然の関係が、在来知であれば密接な係わりを持ち、科学知であれば対象化されると見る視角は、妥当性を持っているのかという点である。そして三つ目は、社会と自然の関係を、多様なディンプリンの知を通じて考察していく上で、生物資源のみを参照するだけで足りるかという点である。これら三点は、次年度の問いでもある。

図 1

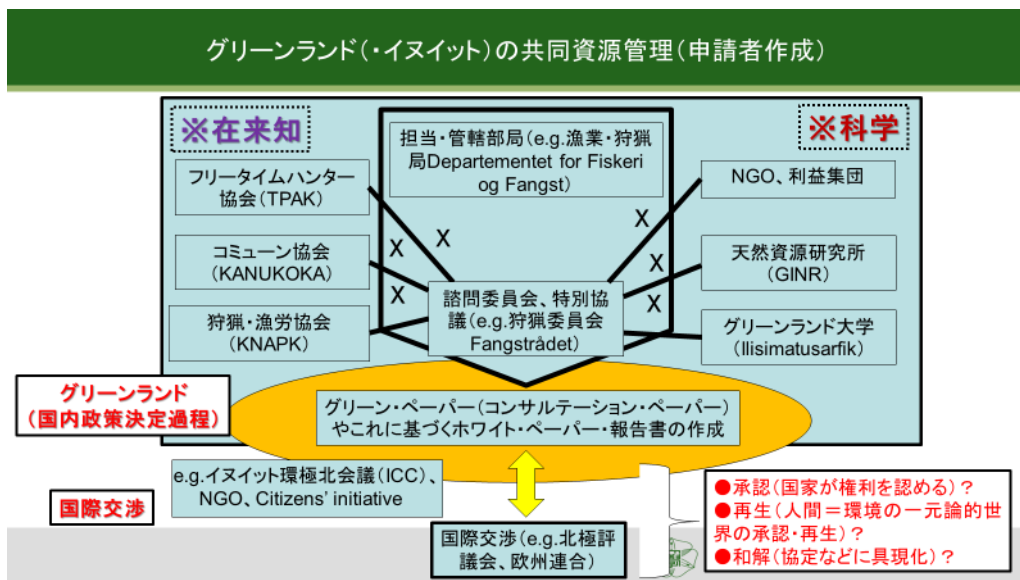
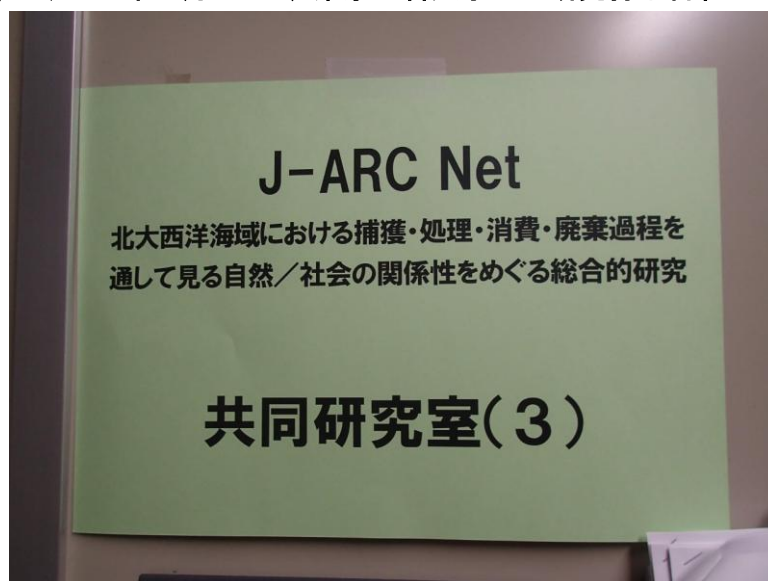


写真1 (2019年5月18日、東京理科大学での研究打ち合わせにて)



(2) 本共同研究に関連する活動（研究打合せ、学会参加、調査等）を実施した場合には、下表に記入してください。

日程(月日)	日数 (日)	活動内容	場所	共同研究員・研究協力者の参加者名	参加者数 (人)
2019.5.18	1	研究打ち合わせ (高橋発表)	東京	高橋美野梨、赤嶺淳、中丸禎子、福永真弓	4
2019.9.26	1	研究会 (Zoom) (高橋発表)	-	高橋美野梨、赤嶺淳、小澤実、中丸禎子、福永真弓、中尾なづな	6
2019.10.28	1	研究会 (Zoom) (中尾発表)	-	高橋美野梨、赤嶺淳、小澤実、中丸禎子、福永真弓、中尾なづな	6
2019.11.27	1	研究会 (Zoom) (中丸発表)	-	高橋美野梨、赤嶺淳、小澤実、中丸禎子、福永真弓、中尾なづな、林直孝	7
2019.12.4	1	研究会 (Zoom) (小澤発表)	-	高橋美野梨、赤嶺淳、小澤実、中丸禎子、福永真弓、中尾なづな、林直孝	7
2019.12.18	1	研究会 (Zoom) (赤嶺発表)	-	高橋美野梨、赤嶺淳、小澤実、中丸禎子、福永真弓、中尾なづな、林直孝	7
2020.1.22	1	研究会 (Zoom) (福永発表)	-	高橋美野梨、赤嶺淳、小澤実、中丸禎子、福永真弓、中尾なづな、林直孝	7
2020.3.7	1	研究会 (今年度 振り返り+次年度 以降の取組)	東京	高橋美野梨、赤嶺淳、中丸禎子、林直孝	4

【研究論文や著書等】

著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、査読の有無、インパクトファクター(IF、分かれば)、分野(表下にある(注3)から一つ番号を選択)を記入して下さい。

著者名, 発行年, 論文タイトル, 掲載誌名, 巻・号, ページ, DOI	査読の有無	IF	分野 (注3)
高橋美野梨(2019):日本のなかの北極、北極のなかの北海道、日本ネシア論(別冊『環』25)、藤原書店、434-436	×	-	⑨
高橋美野梨(2019):EUの「クジラの生と死に対する管理」とその政治的含意、国立民族学博物館調査報告(SER)、149号、175-193、doi/10.15021/00009435	○	-	⑨
Takahashi, M. (2019): Политическая система и устойчивое будущее в Арктике, Вечная мерзлота и культура: Глобальное потепление и Республика Саха (Якутия), Российская Федерация (Permafrost and Culture: Global Warming and Sakha Republic (Yakutia), Russian Federation), 56-59	×	-	⑨
Takahashi, M. (2020): The Contours of the Development of Non-Living Resources in Greenland, <i>Polar Record</i> , Special Issue, 1-10, https://doi.org/10.1017/S0032247419000676	○	1.2	⑨
高橋美野梨(2020):開発と先住民族、北極の人間と社会:持続的発展の可能性(スラブ・ユーラシア叢書)、北海道大学出版会、261-288	○	-	⑨
Takahashi, M. (forthcoming): The Future of Greenland: Political and Economic Implications for the Arctic - Commentary: An International Relations Perspective, <i>The Arctic in World Affairs: A North Pacific Dialogue on Global-Arctic Interactions - The Arctic Moves from Periphery to Center / 2019 North Pacific Arctic Conference Proceedings</i> .	○	-	⑨

(注3) 分野:① 化学 ② 材料科学 ③ 物理学 ④ 計算機&数学 ⑤ 工学
⑥ 環境&地球科学 ⑦ 臨床医学 ⑧ 基礎生命科学 ⑨ 人文社会系

【研究発表】

以下の事項をご記入ください。

発表年月日、発表者名(共著者を含む)、発表タイトル、発表学会等名称、発表地(国、県、市など)、招待講演についてはその点も明記してください。

発表年月日	発表者名	発表タイトル	発表学会等名称	発表地	招待講演 (○)
2019.5.25	Takahashi, M. (Hokkaido)	The Politics of	ASSW: Arctic	Arkhangel'sk	

	University)	Sustainability Surrounding the Development of Non-living Resources in Contemporary Greenland	Science Summit Week 2019		
2019.6.8	高橋美野梨(北海道大学)	開発とグリーンランド独立:いま、北極で起きていること	北海道大学 研究所・センター 合同一般公開サイエンス・トーク	札幌	-
2019.6.14	高橋美野梨(北海道大学)	北極グリーンランドにおける非生物資源開発と独立問題	スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会	札幌	-
2019.8.15	Takahashi, M. (Hokkaido University)	SESSION II: The Future of Greenland: Political and Economic Implications for the Arctic (Commentary: An International Perspective)	2019 North Pacific Arctic Conference Global-Arctic Interactions	Honolulu	○
2019.10.31	Takahashi, M. (Hokkaido University)	To what extent is the development of non-living resources compatible with the “indigenous knowledge” in Arctic indigenous communities?	2019 年度北海道大学共同利用・共同研究拠点アライアンス部局間横断シンポジウム	札幌	-

2020.3.3	Takahashi, M. (Hokkaido University)	International Relations and the Anthropocene	ISAR-6	Tokyo	-
2020.3.3	Akamine, J. (Hitotsubashi University)	New Era of the Coastal Whaling in Norway and Japan	ISAR-6	Tokyo	-
2020.3.3	Hayashi, N. (University of Calgary)	Never-ending community building in the ever-shifting environment in Greenland	ISAR-6	Tokyo	-
2020.3.3	Hansen, A.M. (Aalborg University)	In the Shadow of the Mountain	ISAR-6	Tokyo	-
2020.3.3	Shinohara, M. (Kyoto University)	A philosophical consideration on the worldly setting in the Anthropocene	ISAR-6	Tokyo	-
2020.3.9	Takahashi, M. (Hokkaido University)	Rethinking Whaling in Relation to Ritual and Taboo: A Consideration of the Present Situation of Arctic Indigenous Societies with a Focus on Greenland	International seminar on Arctic Future, Trans-disciplinary discussion of transforming Arctic and human society	Sapporo	-

【特許等】

特許・実用新案・商標などの出願がありましたら記載願います。

例) 特許第〇〇〇号(特願〇〇〇-〇〇〇)「発明名称〇〇〇〇〇〇〇〇」

なし

【本共同研究に関連して実施した集会(注 4)等】

(注 4) 共同研究者、研究協力者、招へい者以外を含む参加募集によるもの

実施日、実施地(国、県、市など)、集会等名称、概略内容、対象者(「主に研究者」あるいは「主に研究者以外」)、参加人数(「主に研究者を対象」とした場合は外国研究機関の所属者の内数についても括弧内に明記ください。)

実施日	実施地	集会等名称	目的及び内容概略	対象者	参加人数()
2020.3.3	Tokyo	ISAR-6 Session 13, Building an Autonomous Arctic Community in the Anthropocene: Redefining the Human-environmental Ties	北極域のコミュニティが気候変動に適応する際に抱え得る諸課題を、コミュニティの構築と発展の観点から把握することにパネルを組織した(Main convener: Hayashi, N.; Co-convener: Takahashi, M.)	研究者	

【本共同研究の発展】

本共同研究の成果が科学研究費などの外部資金の応募(予定を含む)やプロジェクトに発展した例があればご記入ください。

なし

【アウトリーチ、取材、その他】

取材・新聞掲載などがありましたら、日時、新聞名、記事コピーを添付して頂くようにお願いします。

なし